22 牛乳配り

明の住んでいる市で、身寄りのないお年寄りが亡くなったが、しばらくだれも気がつかなかったという不幸な出来事があった。

そこで市役所としても、ひとりぐらしのお年寄りを毎日訪問する方法はないかどうかを検討し始めた。

そんなことのあったある日の夕方のこと、牛乳商業組合の会合からもどった父が、

「新せんな牛乳を、毎朝ひとりぐらしのお年寄りの家に配達することになった。そうすれば、ひとりぐらしのお年寄りの健康づくりにも役立つし、異常がないかどうかも、早く発見できるというのが市役所の考えだ。」

と話した。

明の家は、このような身寄りのないお年寄りの家を四けん受け持つことになったが、そのうちの一けんだけが、方角がちがっていた。

母も小さな妹のめんどうをみなければならず、人手不足である。父が、

「どうだ、明も牛乳配りを一けん手伝ってくれないか。」

と言った。

それは、明の家から自転車で十分ほどの所にあるおばあさんの家だったが、明には、気の重い仕事であった。

というのも、明は朝ねぼうで、毎朝家の者から、何回も起こされてから起きる始末である。まして、このおばあさんはどんな人か、明は知らない。「見ず知らずのお年寄りに、どうして、このぼくが、牛乳を届けなければならないのか。」と、思ったりした。

このようにして、いやいやながら、明の牛乳配りは始まった。

明がおばあさんの家の牛乳ばこに牛乳パックを入れるのは、だいたい六時半

ごろであるが、おばあさんは、そのころにはまだ起きていないのか、一度も顔を見せたことがない。

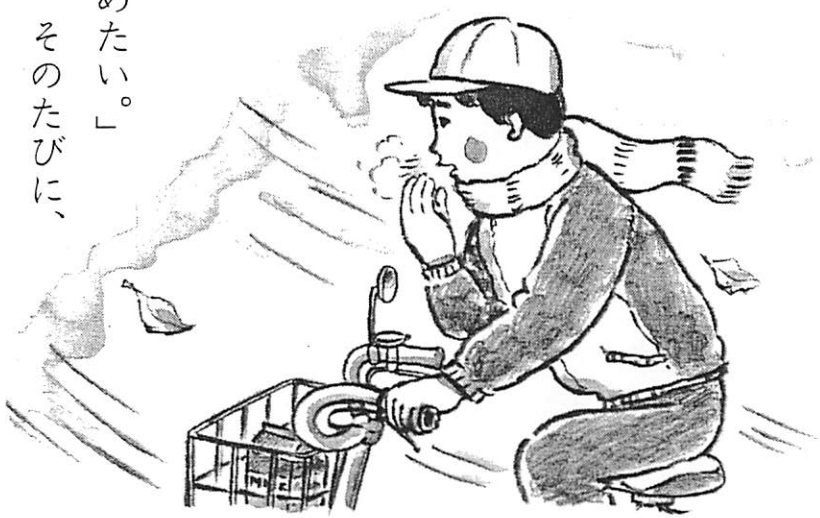
でも、前日届けた牛乳パックが、牛乳ばこの中にないところをみると、それを受け取っていることはまちがいない。

秋のなかばから、気の進まないままに始めた牛乳配りも、いつのまにか、自転車のハンドルを持つ手が赤くなり、はく息も白くなる季節になった。

「できたら、あしたから、ぼく、牛乳配りをやめたい。」

と、両親に言ったことも、二、三度ある。でも、そのたびに、

「明、おばあさんは、牛乳を待っているんだよ。」

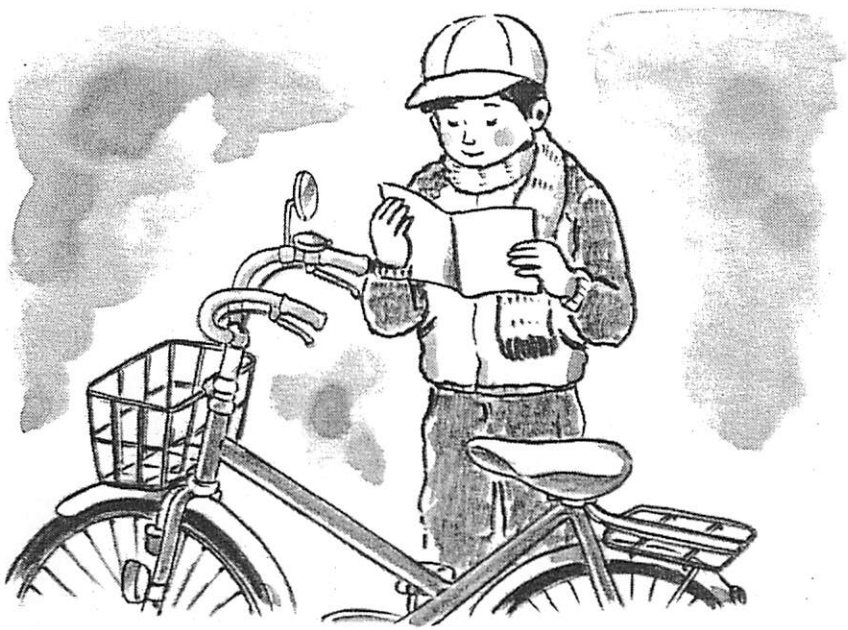


と母にはげまされて、翌朝も、ねむい目をこすりながらハンドルを取る。

朝から雨が降っている日には、自転車でなく、歩いて届けなければならない。学校があるので、急ぎ足で歩くと、体があせばんでくることもある。でも、家に帰ってから、あせをふきシャツを取りかえると、さっぱりした気分になる。

明が牛乳を届けるこの時間には、町はまだ、新聞屋さんとか、朝の早い勤め人しかいない。

ある朝、おばあさんの家の牛乳ばこに、牛乳パックを入れようとすると、はこの



中に一枚の紙きれが置いてあって、
「いつもありがとうございます。牛乳を入れてくださる音を、毎朝不自由な体で、ふとんの中で聞いています。」
と、ていねいな字で書いてあった。
明は、自分のしていることが、単調な生活のおばあさんに、牛乳といっしょに、朝のすがすがしい気分まで、届けていることに気がついた。
そして、さっとさしこんだ陽光を受けながら、朝のすんだ空気を胸いっぱい吸いこんで、力強くペダルをふみ出した。

23 マザー・テレサ

一九七九年十二月十日、ノルウェーのオスロでノーベル平和賞の授与式が行われた。受賞したのは、インドのカルカッタで、貧しい人々の救済に生がいをささげてきた修道院長のマザー・テレサである。
テレサにはこの日、金メダルと賞状と賞金がおくられた。授与式のあとに予定されていたテレサの受賞を祝う会は、テレサの考えによって取りやめられ、その祝賀会の費用もテレサの活動のためにおくられた。

22　牛乳配り

4－(4)　働くことの意義を理解するとともに，社会に奉仕する喜びを知って公共のために役立つように努める。（勤労，社会奉仕）

1 主題設定の理由

〈ねらいとする価値について〉

勤労はもともと自分の生命を維持発展させようとするところから発しているが，同時に他人の社会生活を支えるものともなっている。ここでは，勤労についてのこの意義をよく理解させ勤労を通じて人の役に立つ喜びを深くとらえさせたい。

〈子どもの実態について〉

子どもの仕事に対する姿勢は様々である。仕事に目的をもって取り組む子どももいれば，親や教師から与えられたものとして受け身の姿勢で臨んだり，消極的な態度を示したりする子どもも見られる。

しかし，勤労は，自分だけのためでなく，社会生活を支えるものであることを理解すれば，社会への奉仕活動など，公共のために役に立つ活動にも目を向け，積極的に取り組んでいくと考えられる。また、勤労から得られる喜びをもてるようになれば，消極的な子どもも積極的に取り組めるようになるだろうと考えられる。

〈資料について〉

主人公明は，朝ねぼうのうえ，届ける相手が見知らぬおばあさんということで父からまかされた牛乳配りをやめたいと思っている。しかし，おばあさんからの手紙で，自分のしていたことがどれだけおばあさんに役立っていたのかを知りやる気になったという話である。

明のやめたいと思う気持ちやその理由なるものは，まさに子どもの実態である。そこで，明のやめたいという気持ちに十分に共感させ，おばあさんの手紙で自分の仕事の意義を知った明を通して，自分が日頃行っている仕事の意義を考えさせ，進んで人のために役立つことをしようとする心情を育てたい。

2 ねらい

人のために役立つ仕事を進んでしようとする態度を養う。

□板書

牛乳配り

いやいや
ねむい
→やる気

・朝が早い。
・見ず知らずの人にとどける。

いやいや配るのも当然だ。

・顔も見せてくれない。
・手が赤くなるほど寒い。

やる気などでるはずもない。

いやでたまらない。

おばあさんの手紙

うれしい。
役立っていたんだ。

こんなに喜んでくれているんだ。
こんなに役立っているんだ。
がんばろう。

3 展開

学　習　活　動	支援上の留意点
(1)　家庭での手伝いや社会奉仕の経験について話し合う。	・　ねらいとする価値にかかわる意識がもてるようにする。
(2)　資料「牛乳配り」を読んで，明についての感想や気持ちを話し合う。 ①　明について感じたことを話してください。 ・最後でおばあさんの手紙を読んでやる気になったのはえらい。 ・わたしも朝早い牛乳配りは，どっちかというといやだ。	・　前半の明，後半の明ともに感想を話し合い，心を変えた明に焦点をあてることで，共通の問題意識がもてるようにする。
②　朝が早いうえに，見ず知らずの人に牛乳を届けるということは，どんな気持ちがするでしょう。 ・なぜ，ぼくがしなければいけないんだろうという気持ちになる。 ・ねむたいのにそれが毎日続くと思うといやになる。 ・自分のとくにもならないし，しんだいだけだ。 ・とどける相手の顔もわからないのだからやる気などでてこない。	・　明の立場に自分が立ったつもりで明（自分）の気持ちを話し合えるようにする。 ・　いやいや牛乳配りをする明の気持ちに十分共感できるようにする。
③　こんなにもいやな気持ちで配っている明が，おばあさんの手紙を読んだときって，どんな気持ちがするでしょう。 ・ずいぶんうれしいと思う。 ・自分のやっていることが少しでも役立っているとわかってうれしくなる。	・　いやだと思って配っていた時におばあさんの手紙を読んでどれだけうれしくなり，さわやかな気持ちになるかに気付くようにする。
④　力強くペダルをふみ出した明は，どんな気持ちになったのでしょう。 ・おばあさんが待っていてくれるのだからがんばろう。 ・役立っているのだから，少しぐらいねむいのや寒いのをがまんして，進んでやろう。	・　進んで人のために役立つことをすることは大切であることに気付くようにする。
(3)　自分たちの生活について振り返る。 ○　人のために，役立とうとしたことはありますか。その時，どんな気持ちでしたか。 ・家での手伝いを進んでやるようにした。 ・町内の清そう活動に参加して，とても気持ちよかった。	・　明と同じようにいやいややっていた自分に気付くようにし，その仕事なり手伝いがどう役立っているかを考えられるようにする。
(4)　教師の話を聞く。	・　役立つことを黙々とやっている人の話を聞くことで，実践への意欲をもてるようにする。